

(坂本 勇)

(日本中央競馬会馬事部・東京都千代田区虎ノ門四一三一  
一城山J.T森ビル三二階、電話〇三―三五九一―五二五  
一、一九九〇年、B5判・二五〇頁)

### 富士川英郎著『讀書閒適』

齡八十を超えてなお豊饒な著作活動を続けておられる著者の第三隨筆集である。初出が昭和五十年代の文章もあるが、大部分は元号が平成になってからのものである。

ここに収められた三十篇に近い文章の主題は、前二著と同様、多岐に互っている。頁数から言っても、短いものは一頁から長いものは四十頁を越える文章までいろいろで、その中間に、寛いだ散策の趣を持った鎌倉随想や、医史学・漢詩文ほかに関係のある多彩なエッセイが位置していることになる。そして、右に挙げた最も長く読みこたえもあるのが、「森鷗外と富士川游」と題する論考である。

鷗外は富士川(著者はここで先考をこう呼んでいる)よりも三歳年長で、富士川が広島から上京して中外医事新報社員になった翌年(明治二十一年)に、ドイツから帰朝して間もなく陸軍軍医学校教官に補せられ、二十二年には「東京医事新誌」の編集主任になった。鷗外は直接間接に富士川と接触を持ちながらも、初期には彼のことを単に「中外医事新報記者」とのみ記録している。

著者は富士川・鷗外双方の記憶違いを訂正しながら、その頃からの両者の関係を丹念に跡づけるが、それは富士川が医史学者として顕れるに伴って変化して行き、やがて三十七年に出版された『日本醫學史』に、鷗外は「學者若シ此書ヲ編キテ富士川氏ノ眞ノ良史タル所以ヲ知ラバ又奚ゾ其ノ醫界ニ貢獻シタルコトノ大ナルヲ疑ハンは是ヲ序ト爲ス」で終る序文を寄せるに至る。一方で富士川は同書の奥書で「森博士ハ……又醫史學ニ精シク、早ク既ニ日本醫學史ノ撰著ニ手ヲ着ケラレタルコトアリ」と記したが、『鷗外全集』には鷗外が通史としての日本醫學史に着手した形跡は見られない。

ついで、著者は鷗外が陸軍省医務局長時代の大事業であった臨時脚氣病調査会への富士川の参画などを記述したあと、大正四年以降鷗外がその史伝の執筆に当って、富士川に問い合せの書簡を送り、また直接に訪問し、更には多くの資料を借覧した様子を、鷗外の日記・書簡や富士川の編著などに基いて明らかにしている。

この論考は、大正中期に小学生だった著者が、父君に伴われて乗った東京市電の中で鷗外と乗り合せて、二人が愉しげに談笑するのを見つめている場面で締めくくられている。その起筆が鷗外・富士川の双方を詠み込んだ川柳の引用であるのと相俟って、本来なら堅苦しくなり勝ちな論考を readable なものにする著者の配慮をも見ることが出来る。また、本書を一貫する著者の文体は平淡で、修辭への苦辛の跡を留めないのがこの著者の修辭だと言いたいくらいであるが、この市

電の中の鷗外は、本書の地の文としては例外的に、「少し誇張して言えば、神采奕々と言ってもよい」と形容されている。よほど印象的だったのであろう。

医学史の關係でこれに次いで多くの頁を占めるのが「C・W・フーフエラント」で、この臨床学者の生涯が、その当代ドイツの代表的知識人としての側面とともに生き生きと描かれて、有益な文章になっている。また、「内藤湖南と医学史」も、中学初級で歴史学の専門雑誌を購読したという著者ならではのもので、狭い視野に偏り勝ちな我々医学出身者の蒙を開くに充分な力を持っている。

多少私事に互ることをお許し頂くと、前著『讀書好日』、『讀書游心』で高校ドイツ語の旧師菊池栄一(教材シュティフター)、竹山道雄(エッカーマン)、医学部の小川鼎三、太田正雄の諸家に再会した私は、本書で緒方富雄博士回顧の文章に接することができた。土肥慶蔵・入澤達吉・呉建ら諸家の随筆をそれぞれ扱った章もある。

漢詩文については、私は紹介者としての資格に欠けるが、詩に添えられた読み下し文が、近年往々にして見掛ける原詩の格調も律動感も無視した底のものでなく、日本人の漢詩鑑賞の伝統に沿った、安心して頼れるものであるのは、私のような読者にも有難いことであった。

三冊の随筆集を並べて見ると、どれもが愛蔵するに足る美本であるが、本書の装本が最も好ましいもののように思われた。

(小沢書店・東京都豊島区雑司谷二一四一、電話〇三—五九九二—二四四一、平成三年十二月、A5判・変形二三七頁・定価三〇九〇円)

『原野を拓く——関寛 開拓の理想とその背景——』

医学史の研究者には知られた名——関寛斎。通常なら隠居の身に安住する年齢になって、日本一極寒といわれる地に入植するという、一般人には奇行とも思われる行動をおこした一人の医師、関寛斎の医学の道から開拓・農場経営という両極端の道程を明らかにしたのが本書である。

既刊のものと比較すると、本書の視点を極寒の地トマムに中心をすえて、寛斎の医師としての動きが描かれている点に特色がみられよう。医師としての活動の記述に、最も適格な執筆者酒井シツ氏が当たったことも幸いであった。医学の道に入る動機から徳島での開業に至るその道筋が、順序よく記述され、寛斎の生きざまの変化が見えてくるようである。

しかも人との出会いがいかに大切であるかということが、行間を通して感じられる。

人との出会いの大切さは他の章についても強く感じられた。そしてまた、他の章の記述は地元の研究者が筆を執っているのも当然であるし、それが郷土叢書としてのほんとうの役割を果たすことでもある。